

音楽科4年「4年1組ばやしをつくろう」

浜松市立雄踏小学校 鈴木尚子

1 はじめに

浜松の子供も大人も、このかけ声、このラッパのふしに血が騒ぐという浜松まつりがあるように、雄踏にも昔から伝わる大太鼓とおはやし、山車で地域の人々を魅了するお祭りがある。本單元では、地元で伝わるおはやしや郷土の音楽に触れ、曲想や音楽を形づくる要素などに感じたり気付いたりしたことを生かしておはやしづくりをしていく。こんな4年1組ばやしにしたい、という思いや意図をもち、仲間と共に創作する活動を通して郷土の音楽のよさに気付き、関心をもったり大切にしようとしたりする態度を育みたい。

単元の導入では、地域のお祭りを子供たちが紹介し合う。子供たちは横笛の練習や自分の背丈よりもずっと大きい和太鼓について語り始める。そこで「4年1組でおはやしをつくってみよう」と投げ掛ける。子供達の頭の中が疑問だらけになったところで、その疑問を解決しておはやしをつくるという学習の見通しをもたせる。学習の必要感とわくわく感をもって学びを進めていくことが、より子供達の力になると考えた。

2 実践

(1) 活動内容、課題の発見～解決

「曲を作るの？そんなの無理だよ！」

「4年1組ばやしをつくろう」と投げ掛けたときの教室はざわついた。この先の学習で何をどうしていったらゴールのおはやし完成するのか見通しのもてない子供達に、学習の意欲は感じられない。地域のお祭りのおはやしについて紹介し合ったことを振り返ると「お兄ちゃんの横笛があるよ」「大きいバチででっかい太鼓を打つんだ」

「♪ひーらひらひら♪と笛をふくよ」お祭りの華やかで楽しい様子を思い出し、中にはリコーダーで横笛のふしらしきものを演奏する子も見られた。「おはやしつくれたらすごいね」「どうやってつくればいいの？」子供から疑問が上がったところで「おはやしづくりのハテナ」を子供達に挙げさせてみた。①リズム選び②楽譜への表し方③楽器選び④心配なこととして一人で1曲つくるのは大変、と大きく4点にまとめられた。

まず、日本の民謡を聴き、日本の音楽の特徴を感じ取りながらおはやしづくりに生かせそうなことを探した。「元気がよくて弾んだ感じは、タッカのリズムがいい」「ゆ

ったりとした感じのときは音がのびている」リズムのバリエーションを皆で書き出してみた。「曲の速さを決める」「かけ声があるのも楽しそう」「同じリズムの繰り返しもいい」「すずも合いそう」「手拍子も楽器になるかな」おはやしづくりの材料が少しずつ集まってきた。次に「こきりこ」を扱い、曲に合う楽器選びをしたり、楽器の組み合わせ方や音の出し方を工夫したりする活動を通して、おはやしのリズム伴奏づくりにつなげていった。そしておはやしづくりである。ミ・ソ・ラ・シ・ド・レの6音を使い、4分の4拍子、2小節の旋律をつくり、4人がつなげる。それにリズム伴奏や掛け声を工夫し、最後に8チームの演奏をつなげてみた。

(2) 学び合い

おはやしづくりでは、4人一組で活動を進めていった。リーダーになれる子を各グループに配置し、教え合うことができるようにした。グループでどんなおはやしにしたいのかという思いを明確にし、思いを表するために必要な要素を見付け、試行錯誤する時間を確保した。リズム譜を書くことに抵抗がある子供に対しては口ずさんだり手拍子をしたりすることで表現させ、それを教師が楽譜に表した。できあがったおはやしは、旋律（リコーダーや鍵盤ハーモニカ）2名、打楽器2名で分担。他のグループと主にリズム伴奏と旋律のバランスを聴き合った。「リズム伴奏の音が細かすぎるからバラバラだよ。タン・タンにかえてみたら」「太鼓の音が大きすぎるね。打ち方を変えてみよう」と気付いたことを伝え合い、よりよい演奏に近づけていった。

友達にアドバイスをもらったりグループで話し合ったりしてみたが、どうもうまくいかない。そのような時の疑問をもった子供達と教師との学び合いも、また大切にしていた。

3 成果と課題

学習の課題を自ら見つけ、見通しをもって取り組む学習では、子供達が意欲的、主体的に学ぶ姿が見られた。創ったり演奏したりすることに抵抗のある子供も課題解決に向け、次時を楽しみに学習を進めることができた。音楽をつくる楽しさも実感できたことであろう。しかし、技能面に未熟さのある子供は、思いがあっても表現にたどり着かないことがある。発達段階に応じた技能の定着と支援の必要性を感じた。今後も子供達に付けたい力を明らかにした上で子供達と共に課題を見つけ追究していく授業を研究し、子供達の「学びたい!」という気持ちを引き出していきたい。